

住教育のカリキュラム開発に関する実証的研究

—家庭科の可能性をひらく授業づくりの理論と実践—

主査 妹尾 理子*1

委員 大矢 英世*2, 金子 京子*3, 富田 道子*4, 野口 裕子*5,

家庭科教師の多くは、住生活分野の授業づくりに対する苦手意識をもっており、現場で活かせるカリキュラム開発は重要な課題である。本研究では、大学教育学部に所属する住居・住環境学を専門とする研究者と、現場の家庭科教員が協同して研究会を開催し、住教育について学びあいながら、カリキュラム開発に取り組んだ。理論面を深めると同時に、学び考えたことを学校現場で授業実践することで、その効果や課題を明らかにすることができ、再びそれを検討しあうことで、実効性のあるカリキュラム開発が可能となった。教師が主体的に学ぶ機会を持つことは、苦手意識の克服につながり、住教育への意欲や自信につながることも確認することができた。本研究は、今後の家庭科における住教育の進展に資するものと考えられよう。

キーワード : 1) 住教育, 2) 家庭科, 3) カリキュラム開発, 4) 授業実践, 5) 教材,
6) 住まい, 7) 住環境, 8) 教師支援

AN EMPIRICAL STUDY CONCERNING DEVELOPING CURRICULUM ABOUT HOUSING AND COMMUNITY LEARNING IN HOME ECONOMICS EDUCATION

-The Theory and Practice of Making Lessons for the Possibility of Home Economics Education-

Ch. Michiko Seno

Mem. Hideyo Oya, Kyoko Kaneko, Michiko Tomita and Yuko Noguti

Teachers of Home Economics Education are not good at educating students about housing. They would like to develop and use curricula at their schools. We conducted some workshops about teaching methods and materials for housing education in home economics. The members in this group are a researcher and some elementary, junior high school, and senior high school teachers. We studied not only theory but also practice. According to the results, we have developed some curricula about housing and community. We also ensured that teachers were able to overcome feelings of anxiety and be motivated to study subjectively. We hope that this study will contribute to developing housing education in home economics.

1 研究の背景と目的

学校教育において主に住教育を担う立場にある家庭科教師の多くは、住生活分野に対して苦手意識を強く持っており、十分に授業ができていないのが現状である。その理由としては、①教師の学習経験の不足 ②個人の経済状況を反映しやすく、プライバシーの面から扱いにくい ③学んだことを子どもの生活にすぐに活かすことが難しい などがある^{*1)}。高等学校家庭科教員に行ったアンケート調査(2009年6月実施)でも、「時間が無い」「授業の方法(体験・実習のさせ方)がわからない」「知識が不足している」などの悩みが出されていた^{注1)}。これら住教育の困難性と同時にその重要性については、1970年代から現在に至るまで指摘され続けてきたことでもある^{*2)}。

しかし、住生活分野も他の食生活や衣生活に関する分野と同様に、人間生活の基本として、身近な生活から課題を見つけ学びを深めるべき分野であり、それは学習指導要領にも明示されている。今後大切なことは、理論面での研究をさらに深めると同時に、何をどう教えればいいのか、という実践面の充実をはかることであろう。

この実践面の充実のためには、研究者と小・中・高の現場教員が協同し、理論と実践を統合させた研究を深めていくことが重要だと考える。

そこで、本研究では、大学の教育学部で住居学を担当し住教育を研究する研究者と、小学校・中学校・高等学校で家庭科を担当する教師をメンバーとして、住教育研究会を組織し、そこで学び合うことで、学校現場での実践に活かせる内容・方法を含めたカリキュラム開発を行

*1 香川大学教育学部 准教授

*2 早稲田実業学校 他 講師

*3 さいたま市立大谷場中学校 教諭

*4 法政大学高等学校 教諭

*5 千葉県立松戸国際高校 教諭

表2-1 住教育研究会(全15回)の概要

回	日時	内容	主な討議資料・教材
1	(2008) 4月12日	妹尾(主査)より、持続可能性を主題とした住教育を提案した著書『住環境リテラシーを育む』の内容について、住教育の内容や方法を中心に解説。その後、それぞれが、これまでに実践してきた住生活分野の授業について紹介。	妹尾理子『住環境リテラシーを育む—家庭科から広がる持続可能な未来のための教育—』(南文社、2006)
2	5月3日	研究を始めるに当たり、教材会社のカタログをみて、使いたいものがあるか検討。続いて、総論を知る上で、タイムリーで興味深い論文として、家政学会の論文を読み合わせて討議。 妹尾(主査)が編集委員として製作に参画したDVDから、主担当部分、コレクティブハウス「かんかん森」の部分の視聴→詳しい討議は次回。	宮崎陽子他、大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題、日本家政学会誌Vol.59、No.4、2008 (株)ニチブン発行：家庭科教育実践講座AVANCE 動画(DVD)O3「保育・家族」(2007)
3	6月7日	住教育の大切さについての意見を集めた1987年建築学会の大会資料から、学校教育関連部分について既視し、住教育に関する1980年代の動向について知る機会とした。 前回紹介したDVDのうち、コレクティブハウスに関する内容をみて、授業の可能性を討議。インタビュー部分が聞き取りにくいことから、金子(委員)の実践のように解説書にある活字化されたものを活用するとよい事、平面図の利用などについて討議。 景観をテーマに妹尾(主査)が以前に高校で行った「黄色いビル論争」をとりあげた授業実践を報告し、討議。大分の高校で実践された「家族の生活と住居」(日隈佐喜子教諭)の授業実践を読んで意見交換。 大矢(委員)の家族(子ども・高齢者)に関する授業のあとの、夏休みの課題について、どんなものがよいのか、課題の提起があり、写真を撮ってくる「ウォッチング」レポートの課題の出し方などについて検討。	『市民と住宅—住教育の視点から—』(日本建築学会・建築経済委員会 研究協議会資料) ニチブン発行：HDD家庭科教育実践講座AVANCE 動画解説書 妹尾理子「『景観』をとりいれた住環境教育—高等学校家庭科の授業実践から—」(住総研『住まい・まち学習』論文集)2000 大分県高等学校教育研究会教育課程検討委員会編(1995)『男女で学ぶ家庭科—はじめての一步—』所収
4	7月19日	妹尾(主査)が大学で放射温度計を使って実施している家庭科教材研究の授業について、『技術教室』の原稿を用いて紹介。「暑さを科学し、涼しさをつくる知恵を探ろう」というテーマで、温度測定させ、放射熱から考える授業について紹介し、討議。 大矢(委員)より、家族や高齢者の授業を終えて、「身近な住環境について考える(住環境ウォッチング)」という課題を、夏休み前に高校1年生に出したことが報告され、この課題を2学期の授業の導入に使い、発展させるか迷っていること、討議を行った。コレクティブハウジングのDVDも使いたいと希望あり。討議し、次回再度検討すること。	『技術教室』、No.675(2008.10)に掲載 ^{x3)} 赤外線放射温度計
5	8月21日	前回及び前々回の資料について、再度討議。新たな資料として日本建築学会発行の本も見ながら実践の可能性を討議。 シックハウス問題の資料(妹尾作成)をもとに討議。シックハウスや化学物質過敏症の知識や専門的な情報の不足が不安になって、授業で取り上げにくいといった悩みが出され、体験談も含めて化学物質の話で議論は活発に。 同時に、ヘリウム風船の実物を見ながら、換気の授業の展開などについて話し合った 専門家による住まいの安全・安心の授業づくりの例として、神戸すまいるネットの活動について討議。教師だけでやるとしたら何ができるか検討。 妹尾(主査)より、名古屋大学で開発された筋交い学習教材「紙ぶるる」を紹介、筋交いの理解としてはおもしろく、わかりやすい。印象に残る学習が可能になる。	日本建築学会『学校のなかの地球』(2004) ※実教出版教科書「家庭総合21 指導解説書」掲載 ヘリウム風船 神戸すまいるネット資料 名古屋大学大学院福和研究室・応用地震計測(株)：「紙ぶるる」
6	10月4日	富田(委員)より、朝日新聞記事(2007.7.28)「自然と共生『エコハウス』」の紹介。最近、様々なところでモデルハウスがあり、どんどん新しくなっているの、行ってみるとよいなどと話し合い。関連して、最近の話題として、遮熱効果のある塗料の話題なども討議。 野口(委員)より、千葉県の研究授業での、防災関連の授業実践「防災の視点を取り入れた授業づくり」(2008)の紹介があり、討議。前回紹介した地震模型「ぶるる」をもう一度紹介し、実際に組み立ててゆらしてみた。作るのも楽しく、揺らしてみても、筋交いの効果が歴然で、非常に面白いことを実感。さらに、『家庭科研究』10月号より寺尾信子氏論説「『地震防災』を通じて考える学校防災」を読んで、討議。 大矢(委員)の実践の経過報告と討議。高校1年生に対して行った夏休みの課題「身近な住環境について考える」が紹介された。さらに、授業の報告。C11「かんかん森」のDVDを授業の最後のみせ、平面図やインタビューの資料プリントをみせたときの生徒の様子等が紹介され、討議した。「住みたいと思う」との答えは、4クラスで、5・5・10・15人で、一番授業がやりやすいと感じているクラスで人数が多かった。平面図の読み取りや、家族の変化「建築界の脱nLDKの動き」、住宅政策の変化などの解説も行い、環境共生住宅についても紹介した。「人との共生」から、「環境との共生」へと展開させた実践報告について討議。	荒木美穂「防災の視点を取り入れた授業づくり」『家庭科研究』(2008)、寺尾信子「『地震防災』を通じて考える学校防災」『家庭科研究』(2008) ※『家庭科研究』281(2009.2)に実践報告掲載 ^{x4)}
7	11月15日	富田(委員)より、スタートしたばかりの「家族」の授業プリントと授業の様子について報告。授業のねらいや今後の方向について討議した。生きていく上で必要な力、たとえばネットワークを作る力などをつけたい。今後「かんかん森」のDVD等を使用して展開する予定。討議の中で、学習習として平面図の読みとりや法制度についても扱うこと、住まいの選択の視点等も扱うことなどが提案・確認された。 論文を読んで討議。家具の配置や開取りについて考えることは悪くはないが、自分達としては学ばせたい内容とはあまり思えない、との意見に。子どもの発想が型にはまってしまうような気がするため、こういった展開はしたくないとの意見も。「今後の課題」のところに、中越大地震から3年目である、と書いてあったのを読んで、貴重な経験をしているのだから、防災の視点から学ぶ授業を考えるのがよかつたのではないか、という意見も出された。	佐藤ゆかり他「住空間分析と家族の生活との関連性」千葉大学教育学部紀要56(2008)
8	12月26日	横浜国立大学の大学院生より依頼があり、建築分野からの住教育(教師支援)の取り組み事例について意見を求められた。世田谷区における「みんなで住まいの音を考えよう」「みんなで住まいの音を考えよう」をテーマにした公開実践の内容について説明を受け、意見交換。	世田谷区における住教育支援事業の概要パンフレット
9	(2009) 1月31日	妹尾(主査)の大学授業で、空気の安全についてとりあげたときのもの。直後に学校で一酸化炭素中毒事故があり、重要な学習課題であると確認した。 論文討議。意見：ライフステージごとに学ぶのは良いかと思ったが、授業の流れをみると同じような課題がどこにも見つかり、時間不足の中でどういかもしれない。学習の満足度の結果は最初が最も高く、あとは下がっていることから想像される。ライフステージごとに、という設定にこだわらずにテーマで学ぶ方が授業しやすいと思われた。 野口(委員)の来年以降の授業計画について話し合い。	「一酸化炭素の危険性」プリント 岡田みゆき他「ライフステージでとらえる住生活の授業実践」第1報、第2報(家庭科教育学会誌、55巻1号、2004)
10	2月28日	各学校での授業の近況および新学習指導要領、教科書記述等について意見交換 野口(委員)より出された資料：高校家庭科における製図学習について討議。家庭科では製図に時間をかけるよりも他のことを学ばせたいとの意見多い。 富田(委員)の授業経過報告と討議。家族の授業から入り、「支えあう暮らし」という流れから、コレクティブハウスの学習を行い、その後、住環境(放射・断熱など)の学習へ。簡単な授業後のアンケートでみると、住居学習への興味関心は予想以上に高かった様子がうかがえた。	※『家庭科研究』285(2009.10)に実践報告掲載 ^{x5)}
11	4月1日	富田(委員)からの資料(授業計画例)について討議。よく見ると授業全体の流れがつかっていない、ワークシートの実効性に疑問あり、などの意見が多く出た。	『北海道発 元気な家庭科の授業実践』(教育図書)の住居分野
12	5月4日	前回、富田(委員)紹介のVTR資料の視聴。放送大教科教材は、これまで使ってきたDVDと共通する内容を含むもの。NHK教材は今後の授業で使える内容であった。視聴後、住居分野の学習内容について、教科書目次から討議。	放送大学映像教材『地域福祉の最前線』、NHKビデオ教材『住生活①エコロジーハウス』(教育図書)
13	6月20日	平面図(教育図書)のシール教材を検討。どう使えばよいのか、イメージがわからない、例示された平面図がおかしい、自由に設計しよう、と言われても難しく、生徒はとまどうのではないかと、などの疑問が出た。→大学生の意見をきいてみては?との声があり、後日、香川大学生が実際に使い検討した。自由設計、という指示では難しい、自宅を再現して改善してみるのなら可能、などの意見が出た。使ってみたいか、については意見が分かれた。 住生活分野から始まる教科書について検討。ユニークだが幼い内容で進学校では使われにくいだろう。漫画調の吹き出しは小学校などでよく使われる手法、自学自習なら良い。教師が読んでおくとも良い内容もあるなどの意見。	高等学校『家庭総合』(教育図書)教科書
14	8月19日	野口(委員)の授業報告と討議。導入に工夫した授業が生徒の興味を引く導入となっている。次回、実際のプリントを再度報告し、内容の修正を含めて検討すること。	
15	10月3日	野口(委員)の授業報告と、授業プリントについて詳細に討議。限られた授業時間の中で、導入に使うワークシートだとしたらどんな内容がよいか具体的に検討。遊びにならないように表に記入させながら実験させた筋交い模型「紙ぶるる」の使い方についても検討。その後、今後のまとめ方について討議。	

うことを目的としている。それにより、今後の住教育の進展に向けた可能性と課題を探っていききたい。

2 住教育研究会の概要

住教育研究会は、表 2-1 のように、2008 年 6 月から、ほぼひと月に 1 回のペースで開催した。初回は、住教育のイメージを広げるために、主査が著書²⁾を用いて持続可能性をキーワードに考えた住教育のねらいや学習要素等について概説したうえで、それぞれの今の住分野の授業について報告しあうところからスタートした。その後しばらくは、主査が提示する教材や論文、実践報告などを読み合わせ、意見交換することで、住教育はなぜ必要なのか、どのような課題があるのか、などを考えていった。

特に初めのうちは、住教育をめぐる意識調査や、これまでの建築や都市計画分野の専門家を中心とした議論に関する資料を読むことで、従来の家庭科のイメージにとらわれず、広い視野から住教育を考える機会とした。すぐに授業実践の検討に入らず、理論的なところから入ることは、遠回りのようだが、授業づくりのねらいを明確にすることにつながり、その後の根幹をなすものとして、現場の教員にも必要なことだと考えたからである。

その後は、徐々に実践につながる授業や教材に関する討議に入った。詳細は表 2-1 にまとめたが、例えば、コレクティブハウスを紹介する DVD の教材としての可能性の検討、景観論争から住環境を考える授業づくりの検討や、家族の生活から間取りを考える実践報告の検討などを行った。また、省エネルギーや防災、室内空気環境について学ぶ実験・実習教材など、さまざまな教材についても具体的に測定機器を用いて学び合った。それにより、自分ならどのような授業展開をしたいのか、その意味なども考え、それぞれの授業イメージを広げていった。その上で、少しずつ勤務校の実態や自分の問題意識に合わせた授業づくりに取り組み、実践していった。各授業実践の経過は、報告しあい、授業での生徒の様子や成果、悩み、使用した資料、ワークシートなどを紹介し、新たなアイデアや改善の方向などについて話し合った。

3 住教育の授業開発

住教育研究会を進める中で、さまざまな視点からの授業が計画でき、実践につながった。表 3-1 では、主なものを 9 例紹介している。それぞれの実践は、今後、他の教師が参考にしながら授業づくりをしやすいように、数時間のまとまりを持つ単元の形で整理してある。内容は、授業テーマ、授業（単元）のねらい、授業を実施した時期、対象校の概要、授業の流れについてである。研究会の中で提案され検討した教材や資料が共通していることもあり、同じようなテーマや、同じ資料・教材を用いた

実践もあるが、学校の状況や授業者によって、授業展開は多様になった。これらの授業テーマや展開例は、今後、新たに住教育を行いたいと考える教師が、自分なりの授業を計画する際に、多くの示唆を得られる有用な資料となりうるのではないだろうか。

4 開発授業の具体例と授業者による省察

4.1 授業の詳細と考察

一覧表だけでは開発した授業の様子が伝わりにくいため、実践例としていくつか、実施した学校段階、具体的な授業内容及び生徒の様子、教師の省察について報告する。

授業 1（大学）：「暑さを科学し、涼しさをつくる知恵を探ろう」³⁾

1) 授業の背景とねらい

地球環境問題が深刻になる中、私たちのライフスタイルの転換が求められている。今後は住生活分野でも、環境に配慮した住まいや住まい方の学習が当たり前になると思われる。そこで、夏の暑さの原因について、体験的気づきと共に、科学的理解を深め、伝統的住まいの知恵にも気づかせることでエアコンに頼らない涼しい夏の生活を創造する力をつけることをめざして授業をつくった。主体的に住生活をつくる能力を高めることが大きなねらいである。

2) 授業の流れ

まず初めに教室の温度と湿度を予想し、確認した後、主体的に室内の温熱環境を管理するために、温湿度計を家に置くことの大切さを示した。

続いて、人間の暑さ寒さの感覚に影響をあたえるものは何かをたずね、意見を出し合ったあと、人間の体感温度に影響する基本 6 要素（温度・湿度・気流・放射・着衣量・活動量）を整理する。その上で、グループに分かれ、放射温度計を用いて学内のあちらこちらの表面温度を測り、記録する。そこから暑さの原因について気づいたことをまとめさせる。

ヒートアイランド現象の解説などもとりあげながら、暑さを防ぎ、涼しくするにはどんな方法があるかを考えさせた。同時に、日本の伝統的住まいの特徴をまとめた資料を配付し、伝統的な住生活文化の長所が現代にも様々な形で活かされていることをまとめる。

3) 学生の反応と成果

実際に温度を測る体験は、学生に多くの驚きや発見を与えていた。日本の伝統的住まいの知恵にも関心をもち、「住んでみたいと思った」との感想や、「家庭科での環境教育の役割の大きさに気づいた」といった感想もあり、

表3-1 計画・実践した家庭科授業の概要

	1	2	3	4	5
授業テーマ	暑さを科学し、涼しさをつくる知恵を探ろう	身近な住環境を考えるー住環境ウォッチングから学ぼうー	これからの住まい方について考える	ともに住むかたちの可能性	暮らしやすさと住まい
授業のねらい	・暑さを科学し、エアコンに頼らず涼しい温熱環境を創造する能力を養う ・伝統的な住文化理解を深める。	・自分の身近な住環境の評価レポート作成を通して、住環境への意識を高める ・互いの発表から住環境について視点を広げる	・家族の多様化の中、コレクティブハウスの暮らしを通して、さまざまな共同の住まい方について考える。	・住まいを通して共同(協同)について考え、理解を深める ・「自立」の概念を広げる	暮らしやすい間取りについて理解を深めたいうで、賃貸住宅にかかる費用から、経済的自立の必要性に気づく
対象・時期	国立大学 (教職科目) 2008/06	私立高校 家庭基礎 2008/09	私立高校 家庭基礎2008/10	私立高校 家庭基礎 2009/01	私立高校 家庭基礎 2009/01
授業の流れ	①教室の温度・湿度を予想 ②体感温度に影響する要素を学習 ③学内の温度をはかる ④暑さの原因と対処方法を探る ⑤現代に生きる伝統的住まいの工夫を整理する	①課題の説明 ②住環境ウォッチング(夏休みの課題) ③クラスで一人ずつレポートを発表する	①コレクティブハウスでの生活(DVD)から学ぶ ②共生の住まいづくり	①コレクティブハウスでの住まい方 ②歴史と背景 ③ビデオ視聴 ④住人の声に学ぶ ⑤感想(将来の多様な生活を想像してみる) ⑥ルームシェアから考える	①一人暮らしのための部屋探し(冬休み課題) ②自分が選んだ平面図をチェック ③暮らしにくい間取りをクラスで確認 ④賃貸住宅の費用を計算する
	6	7	8	9	
授業テーマ	住環境を考えるー温熱環境を中心にー	住まいと家族のこれからを考える	間取りから生活文化を読みとり考える	住まいの安全と室内環境の保全	
授業のねらい	・放射熱を理解する・シックハウスの背景を理解し換気の意味と役割を理解する ・自分ができる工夫を考える	・家族が多様化する現在、住まいはどうあるべきか考える。 ・地球環境に配慮した家や住まい方を理解する	・平面図から住生活・住文化を学ぶ ・間取りから家族の生活スタイルや関係性(プライバシー等)を考える	・住居の安全性や環境の大切さを知り、より良い住生活を考える ・耐震のための住居の構造について知る	
対象・時期	私立高校 家庭基礎 2009/01	私立高校 家庭基礎 2009/02	公立中学校 技術・家庭2009/01	公立高校 家庭基礎 2009/07	
授業の流れ	①放射熱を教室環境から考える ②シックハウス症候群と空気環境(熱交換システム) ③昔ながらの省エネの知恵	①多様化する家族のかたちとnLDKの崩壊 ②シングルの時代と住まい ③これからの住まいーリノベーションの重要性ー ④地域環境に配慮した住まい	①クレヨンしんちゃん和サザエさんの家の平面図に家族を配置する ②部屋の使われ方から家族関係を考える ③現代の住まいの長所と以前の住まいの長所を考える	①例題を解きながら住生活での安全性について考える ②教材「紙ぶるる」を用いて実験・考察を行なう ③我が家の安全対策についてグループで話し合いまとめる	

短時間ながら効果的な学びができたといえる。

4) 授業者の省察

暑ければエアコンのスイッチを入れる、と思いこんでいる現代の子どもたちには、このような学習は非常に大事だと感じた。当たり前のような暑さを、放射温度計で測定することで数値化し、大人も子どもも、楽しく、驚きを持って発見・探求型の学びができる。準備ができるならば、実際にすだれなども準備して、体験をさらに充実させて行うとよいだろう。(授業者：妹尾理子)

授業2(高校)：「身近な住環境を考える～住環境ウォッチングから学ぼう～」^{文4)}

1) 授業の背景とねらい

本校の家庭科では、前期(4月～7月)に家族・家庭生活の学習をしている。家族・家庭生活の学習では、子育てや介護の問題も考えてきているので、すでに、家庭生活全般についてのイメージはつけやすく、バリアフリーやユニバーサルデザインなどの大まかな知識はすでに学習済みである。また、子育てにおける住環境について考える素地もできている。

そこで、前期の家族・家庭生活の学習の延長線上に「身近な住環境を考える」授業を計画した。

2) 授業の様子

夏休み前の最後の授業時に、「身近な住環境について考える」住環境ウォッチングの課題について説明した。本校は、私学のため学区がなく、生徒の居住地は比較的広範囲になる。学校のある東京都だけでなく、神奈川県、千葉県、埼玉県、山梨県などバラエティに富んでいる。そこで、自分の身近な地域で、ここぞと思う場所を写真に撮って、その住環境を自分の視点で評価するように指示した。

例として、数枚の写真をデジカメで撮影し、コンピュータに取り込んで、教室のスクリーンに映して示した。



写真 4-1 通学路の様子

写真 4-1 は、JR 中央線国分寺駅からの生徒の通学路で、生徒にとって見慣れた道路である。しかし、ここは坂道

で、歩道を自転車はかなりスピードを上げて通っていくので、ヒヤッとさせられるような場面に出くわすことも少なくない。生徒たち自身も、その危険性を実感している道といえる。そこで、評価を⊖マークとした。

写真 4-2 は、JR 中央線国立駅南口の大学通りである。この通りには、自転車専用道路があり、歩道がゆったりとしている道で写真 A と比較するために用意した。評価は、⊕マークである。

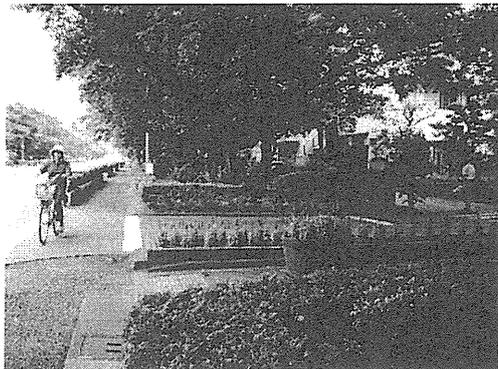


写真 4-2 大学通りの自転車専用道路

写真 4-3 は、東京都国立市の景観訴訟で話題になったマンション。写真 4-2 の大学通り沿いに建っている。このマンションの裏手側隣地には、以前より学校がある。

法的に問題となる訳ではないが、学校側からみると、マンション建設前に比べ、日当たり、眺望において負の影響が加えられた。



写真 4-3 景観論争を起こしたマンション

近隣に住む生徒がいるせいか、国立のマンション訴訟についてかなり詳しい者もいたが、始めて知ったという生徒のために、国立マンション訴訟の概略(図 4-1)を説明した。

大学通りは国立市民の誇りであり、いたるところにベンチが配置され、いこいの場ともなっている。

地域住民や隣地の学校からみると、この高さからみて圧迫感のあるマンションの存在は⊖マークになるといえるが、このマンションに住んでいる立場でみると、桜や銀杏の名所でもある大学通りに面した文教地区の住環境評価は、⊕マークになるだろう。

このように、住環境評価は、人によって、立場によって異なることを説明に加えた。

3) 教室で発表し、学び合う

夏休み明けの最初の授業は、2時間続きで、この住環境ウォッチングの発表に使った。全員の発表について要点を書けるように枠を設けたB4サイズの用紙を配り、発表を聴きながらメモをとらせた。

国立マンション訴訟の概要

1999年 18階建て高さ53mの分譲マンションの建設に、地元住民から反対運動が起こる。



2000年住民の意向を受け、14階建て高さ44mに変更



東京都建築確認を得て、工事着工



約1ヶ月後、国立市の高さ20m以上の建物の建築を禁じる条例が施行



2001年地元住民と隣地学校法人が工事中断等を求める裁判を起こす



2002年12月、東京地裁第一審：建築主にマンションの高さ20m以上の部分を撤去することを求めた判決。



2004年10月、東京高裁第二審：地域住民の景観利益を否認、個人の利益の侵害とは言えず、撤去の必要なしとした。



2006年3月、最高裁判決：景観利益は認めるが、建築主の利益侵害や法的違反がないため、住民の上告を棄却

図4-1 国立マンション訴訟の経過

一人ずつ前に出て、書画カメラで自分の撮影してきた写真をスクリーンに映しながら、①撮影場所 ②どうしてその場所を選んだのか ③自分の考えた評価 ④その評価をつけた理由について、発表した。

その結果、最も多かったのは、バリアフリーに関するもので、最寄り駅のエレベーターや、点字ブロックに着目したものがかなり多かった。せっかく点字ブロックが造られているのに、その上に駐輪されていて機能していない、という問題提起も多数あり、また、エレベーターの中にある鏡がどのような機能を果たしているのか調べて発表する生徒もいた。

住民の生活の安全を妨げる危険箇所や災害時の安全の視点から選んだという発表も多く、洪水時にはため池としての機能を果たす公園や野球場の機能、病院や公民館など、地域の人々の利用する施設に着目した生徒も多かった。

その他、屋上緑化や緑のカーテン、コンビニができたことによる交通量の増加、など、多様な視点による発表から、多くの学びが生まれていた。そして、生徒が新鮮に受け止めていたのは、同じクラスメートに、ビルに囲まれて暮らす人から、田畑に囲まれて暮らす人まで、さまざまいるということだった。「住環境ウォッチング」が生徒同士をつなぐ、共同の学びを育むものとなっていたことがわかる。

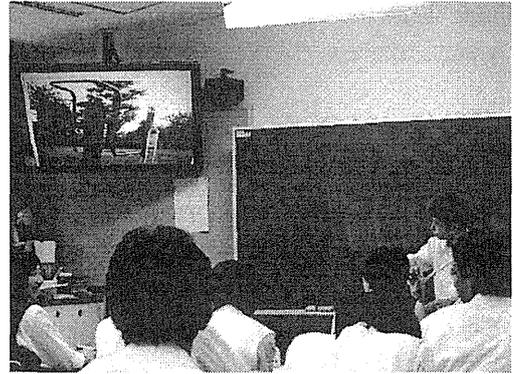


写真4-4 授業での発表の様子

4) 授業者の省察

発表を聴いた生徒の感想には、「みんなの発表が細かく調べてあり、とてもためになった。今回、私は駅や自分の家を撮ったのだが、地域のコミュニティセンターがどういう活動を行っているのか、公園は誰が利用しているのか等、自分の町に照らし合わせてみて、自分が様々なものを見落としていたことに気づいた。この夏、もっと広い目で地域を見るべきだったと思った。」など、住環境を意識的に見る目が自然に養われていた。これらから、住居学習の導入として、「身近な住環境を考える」授業はかなり有効だと感じられた。

その後の授業は、住まいとは何か→平面図をよむ→住宅政策→建築に関する法律…と、住生活全般の学習へと進めていった。しかし、生徒たちの中で住環境について考えるモチベーションが高まっていたので、そのままもう少し、住環境について考えさせる学習を続けた方が効果的な学習となったのではと感じている。今回の住環境ウォッチングは、中学校段階でも十分可能な学習であろう。高校段階ならば、例えば、今回は紹介だけで済ませた「国立市マンション訴訟問題」をさらに掘り下げ、①最高裁判決について感じたこと ②このような紛争を無くすためには地域としてどのようなことが必要か、等について、討論を交えた学習を組んでいくと、よりいっそう学びが深められたと思われる。

(授業者：大矢英世)

授業3 (高校) : 「住まいの安全と室内環境の保全」

1) 授業の背景とねらい

例題：次のAさんからGさんのケースはそれぞれ下記の①～⑦のどれと最も関係が深いでしょうか？

Aさん（男性・25歳）

通勤に便利な駅前の商業地区にあるアパートに住んでいます。隣接する店にカラオケが設置されて、大きな歌声が深夜まで響くようになりました。まず不眠になり、ついでに身体の痛みやだるさを感じるようになりました。（ ）

Bさん（女性・68歳）

私の家族はみな暑がりです。いつも今はクーラーがついています。だんらんときは家族といたいと思うのですが、まるで冷蔵庫の中にいるような冷たさで、夏でも靴下や羽織るものが欠かせません。（ ）

Cさん（女性・36歳）

念願の新築住居に2ヶ月前に引っ越しました。喜びもつかの間、家の中にいると目がチカチカして充血し、そのうち頭痛や吐き気がするようになり、体調がすぐれません。（ ）

Dさん（女性・50歳）

最近、一戸建て住宅から新築マンションに引っ越しました。夫婦共働きなので昼間、家の中は閉め切ったままです。ある日気がつくと、タンスの洋服が変色しており、北側の壁にはカビも生えていました。非常にショックです。（ ）

Eくん（男子・14歳）

僕がまだ2歳だった頃、家族が目を話した際に、沸かしていたお風呂に落ちて大やけどを負いました。そのときは命も危ないと言われたそうですがすぐに治療してもらい、今は元気です。（ ）

Fさん（男性・45歳）

海が好きで、海の見下ろせる高台に住みはじめて20年。ある日突然、その眺めと太陽をうばわれてしまいました。南側の隣家が、全面3階建てに改築したのです。一生ここに住むのかと思うと憂鬱です。（ ）

Gさん（男性・16歳）

夕べ寝ていたら、突然の大きな揺れに目が覚めました。布団を頭からかぶって揺れの収まるのを待ちましたが、本棚の上の写真立てが落ちてきて、運よくガラスは割れずにすみました。物の配置など考えようと思いました。（ ）

- ①家庭内事故 ②騒音 ③換気不足と結露 ④地震対策 ⑤日照 ⑥室内の快適温度 ⑦建材に含まれる化学物質

図 4-2 導入で使用したワークシート

本実践は、「家庭基礎」の住生活分野の1時間目に行なったものである。従来は最後のほうで扱っていた内容であるが、今年、校舎の耐震工事が入ることもあり、住学習の導入部分で生徒の興味関心をひきつけることをねらいとして、住まいの安全・安心をテーマに授業を開発した。この授業は、この後の住まいかたや自然環境との共生、住文化を学ぶ上でも常に配慮すべき要素として、位置づけたいと考えている。

2) 授業内容

本授業は、住分野の導入として位置づけている。住生活におけるさまざまなトラブルについて、プリントの例題を解くというスタイルを取りながら紹介し、身近な住生活に関する事への興味・関心を引き出すことをねらいとした。授業で使用したプリントは、図 4-2 に示したような内容である。

この後、Gさんの事例をもとに、班ごとに耐震（筋交い）実験教材「紙ぶるる」を用いて、筋交いの有無と住宅の揺れ方についての実験・考察を行なった。単なる遊びにならぬよう、実験の意義と手順を丁寧に説明し、記録用のワークシートに記入させた（図 4-3）。

中には自発的にいろいろな状況を想定して、実験している班もみられ、全体的に意欲的に取り組んでいた。実

施時期にちょうど学校の耐震工事が始まったので、タイミングも良かった。これまで「筋交い」という言葉さえ知らなかった生徒達が、耐震のための構造の大切さについて認識を深めることができた。

1. 住宅模型を使って、（筋交い）の効果を実感しよう。

	屋根のみ	重い屋根
筋交い無し		
1階部分のみ筋交い有り		
2階部分のみ筋交い有り		
1・2階とも筋交い有り		

（大揺れ 3 揺れ 2 揺れない 1）

2. 我が家の安全対策について話し合おう

①現状、②効果的だと思われる対策、③すぐにできる対策

①	②	③
---	---	---

図 4-3 耐震実験 ワークシート例

3) 生徒の様子・反応など

例題を用いて、生徒自身の生活体験と結びつけながら考えさせたことは、わかりやすかったようである。また、他の生徒の発言を聞くことにより、自分とは違う住居形態（戸建て・マンション等）を知る機会にもなっていたので、自然に知識が広がったのが有効だったといえる。

簡単な実験として、筋交い模型の「紙ぶるる」を使ったことで、「筋交い」の効果を実感として印象づけることができたのは予想以上に良かった。実験の結果は予測できたものの、揺れ方の違いに思わず歓声をあげる班も見られ、筋交いの有無と屋根の重さによる揺れの違いは、頭で理解していた以上の違いを実感することになった。

4) 授業者の省察

これまで住生活分野の授業では、家庭生活における住まいの役割と住文化、住居の間取り（ライフスタイルと住空間）、室内環境等の学習を、ほぼ教科書の順序どおりに進めていた。しかし、今回初めて住まいの安全を住居学習の導入部分に持ってきた。住居の安全性をめぐる話題（耐震性・シックハウス症候群等）は、今日的課題として取り上げやすく、住居学習の動機付けとして非常に有効であったと思う。

以前は、住居学習の導入では新聞折り込み広告等を持ち寄ってグループ内でその物件を読み取り、自分自身が住まうとしたらということ的前提に長所・短所を探し評価することによって、生徒の興味・関心を引き出すようにしていた。しかし自分の生活の器としてのイメージは広がるものの、安全性については後回しという状況であり、また人との共生という視点が抜け落ちてしまいがちであった。今回、住生活でのトラブル事例や耐震の実験を最初に取り上げたことにより、この後に続く人や自然環境との共生をテーマにした授業においても、基本理念として内容を定着させることができた。

また、夏休みの宿題でホームプロジェクトを出したが、自室の環境整備や我が家の耐震対策に取り組む生徒もおり、食生活にテーマが偏りがちである中、住生活に目を向ける生徒が現れたことも成果と考えられた。

（授業者：野口裕子）

授業4（高校）：「ともに住むかたちの可能性」^{文5)}

1) 授業の背景とねらい

共同の住まい方にはどんなものがあるかを理解し、地域社会とのつながりについて考える。同時に、自立とは必要なときに「支援」を求められることでもあると理解させる。

2) 授業の内容

ここではコレクティブハウスとシェアハウスを中心に取り上げた。まず、平面図からこのハウスでの住まい方についてイメージをふくらませておくことで、コレクティブハウスをより理解できるよう配慮した。

平面図の見方については、冬休みの課題「一人暮らしの部屋探し」で予習させることとし、平面表示記号など不動産広告を見るポイントをまとめた資料を配布した。

3学期の授業は予習をしてあることを前提に進めると事前に伝え、授業時間の短縮を図った。

教科書にあるコレクティブハウスの平面図を使い、「このフロアは何組の家族が入居できる?」「この部屋は、何人で生活できそう?」などと問いかけつつ、プライベートスペースとコモンスペースでの生活をイメージさせた。その際、日本でのコレクティブハウス設立のきっかけが阪神淡路大震災にあったことなどにふれ、このハウスの存在意義をより理解させ、同時に、北欧の住宅政策についてもふれた。

コレクティブハウスをとりあげたビデオ（「日暮里コミュニティ」）を用いて授業を進めた。より深く考えるための資料として、コレクティブハウスの住人へのインタビューを文字化したものをDVD教材^{文6)}の解説書^{文7)}からとり、資料として配布した^{注2)}。

ビデオの中に出てくる女性は、コレクティブハウスでさまざまな生活活動を住人と一緒に行うことの利点を述べていたが、DVD教材のインタビュー資料では、子育て中の夫婦、シングルの高齢者、シングルの若い女性など多様な意見を紹介しているので参考にした。

早く親から独立したい、ひとり暮らしをしたいと願う高校生が多いことから、ここでは、今の自分ではなく、将来を想像しながらコレクティブハウスについて考えさせた。「自分が働きながら子育てをしていたら」「高齢者だったら」「結婚しないでひとりで生きていくとしたら」など、立場を変えて考えることと、自分がコレクティブハウスに住んでみたいと思うか否かを視点として示した。

このとき、すべてのクラスから、入居したくない理由として「人を頼りにした生活は自立じゃない。自分は自立した生活がしたいから住まない」というのが出た。そこで、このような意見は自立の概念を広げるチャンスと捉え、次時に補足をした。

その後、都市部で徐々に広がる可能性をもつシェアハウスをとりあげた。共同生活を始める若者のかかえる問題をとりあげた話題のテレビドラマを用いて、共同生活をする上で必要なマナーのこと、入・退去は二人同時であり、退去の場合は代替りの入居者を見つけなければならないことなどを解説した。

5) 子どもの反応などの成果と課題

すでに「家族のイメージ」の授業を通して、専業主婦が1人で子育てをする大変さ、共働き夫妻が家庭生活や子育てをする上で壁になる事や、高齢者の暮らしの課題などを理解しているため、「共働きや小さな子どもがいる家庭、また高齢者であったら入居したい、あるいは入居するかもしれない」という生徒は、「好きな時に好きなことをしたいから、入居したくない」

生徒の数よりも多くなっていた。生徒の入居したい理由には、さまざまなものがあったが、特徴を整理すると、①コミュニケーション②地域（隣人）とのネットワーク③孤立しない子育て④安心できる住まいなどがキーワードとして整理できた。

6) 授業者の省察

コレクティブハウスの学習から、生徒は住まいの共同や協同の意味を一定程度理解するとともに、住まい手の人権や近隣との関係についても考えられたと思う。しかし、本授業では自立の概念を広げることまでもねらいとしていたが、まだメッセージ程度にとどまってしまう。時間数が限られているなかで、どのような授業展開にしていけばよいのか、さらに検討していくことが課題である。（授業者：富田道子）

授業5（高校）：「暮らしやすさと住まい」

1) 授業の背景とねらい

親元から離れてのひとり暮らしにあこがれる高校生の時期に、物件情報を読み解く力をつけるとともに、住宅費用の計算をさせることで、生活することについて真剣に向き合い、経済的自立の必要性に気づかせたい。

2) 授業の流れ

冬休みの課題「一人暮らしの部屋探し」で探してきた賃貸住宅を、間取りや構造、方角（日照）などの視点から見直させ、悪いところ探しをさせた。その後、平面図の見方と部屋選びのポイントをクラス全体で押さえたいというねらいから、問題点を多く見つけられた生徒数人に書画カメラで、その内容を説明してもらった。

金融広報中央委員会発行の『知るぽると』のなかの資料を参考に、契約時に必要な費用、大学4年間に必要な費用を計算させた。

3) 生徒の反応と授業者の省察

冬休みの課題「一人暮らしの部屋探し」は大変歓迎された。高2という将来のことを具体的に考える時期であったことが大きいと思われる。

授業の進め方では、自分の選んできた物件だけをチェックさせると、よい物件を選んだ生徒はそれ以上学びが広がりにくいと考えた。悪いところをたくさん見つけるよう指示をすると、近くの生徒同士で平面図を見せあい問題点を互いに確認しあっていた。

また、普段から生徒は「正解」や「よいこと」を大人から求められているため、悪い物件を選んできた生徒が「問題点がたくさんあります」と手を挙げにくい。「悪いところはありますか」ではなく「悪いところをたくさん見つけてくれると、他の生徒が学べる機会になる

からしっかり探してほしい」と説明することで、生徒は自分の問題物件を率先して発表することができていた。

賃貸住宅にかかる費用についても、積極的に取り組むことができた。学生の一人暮らしは、自分の力ではとてもできないことを実感するだけでなく、経済的自立の必要性、貯蓄の重要性について実感したとの感想もみられた。（授業者：富田道子）

授業6（高校）：「住環境を考える—室内空気環境・温熱環境の視点から—」

1) 授業の背景とねらい

授業時は、校舎が移転して2年目で、本校は「エコスクール」に認定されているため、グランドや部室棟などには太陽光発電の装置が設置され、エントランスやオープンスペースに置かれたベンチやテーブルは、校舎建設の際に伐採した木が再利用されている。また、校舎の3階から地下1階までを吹き抜けの構造にしてガラス張りの天井からの採光を利用し、各教室にはカーテンボックスや換気に熱交換システムを取り入れている。この新校舎に問題がないわけではないが、3年間を快適に過ごすために利用できるものは最大限に利用し、校舎の良い点に注目させることで環境保護について理解させたいと考えた。

室内空気の問題は、身近な問題であるにも関わらず、子どもたちはほとんど意識していない。そこで、室内空気環境について、暑さ、寒さと放射熱、シックハウス問題との関連で熱交換型換気扇などについて理解させることで、自分の家庭や学校でできることを考えさせることをねらいとした。

2) 授業の流れ

まず、教室環境から放射を考えさせるため、改めて、体感温度が放射熱の影響を受けていることを、自分たちの教室環境から再確認させた。

また、熱エネルギーの授受が最も大きい窓にカーテンが有効であることと、カーテンボックスの効果について説明した。続いて、シックハウス症候群と空気環境についてとりあげ、シックハウス症候群の起こる原因は、新建材や塗料、壁紙、家庭内のさまざまな化学物質が要因だけでなく、省エネルギー要請から普及した断熱材や断熱サッシの導入にもある。換気を十分おこなうことでこの健康障害を軽減することを説明した。

次に、生徒に学校での過ごし方をふり返らせた。生徒は、暑ければクーラー、寒ければ暖房と、インフルエンザでも流行らない限りなかなか窓を開けることをしない。40人近い生徒が密室の中で30分もいれば空気が汚染され、あくびや眠気が起こることを説明し、授業に集中するためには換気が重要だという確認と、教室の熱交換換

気システムについて説明し、活用を促した。

最後に、日本の伝統的住居のひさし、障子、植木、茅ぶき屋根、雨戸など、を紹介しながら、家庭や学校でも快適な温熱環境をつくることができることを確認した。

3) 生徒の反応と授業者の省察

生徒は普段から「この教室は暑い(寒い)」という。なぜ、教室の違いや座席の位置によって体感温度が違うのかを理解できれば、教室での過ごし方や工夫ができる。そのことを念頭に授業を進めたことで、流れがスムーズにできた。

シックハウス症候群については、授業者がかつて体験した防虫剤による被害を語ることで、生徒の家庭でも起こりうることだと受けとめられるよう努めた。

時間が不足気味だったため、この単元について感想を書かせることはできなかったが、授業終了後から高3に進級した現在まで、すべてのクラスで熱交換換気システムを利用している状況を見ると、授業内容がしっかり生徒のなかに定着したのだろうと考えられる。

(授業者：富田道子)

授業7 (高校) 「住まいと家族のこれからを考える」

1) 背景とねらい

多様なかたちの家族が存在する中、住まいに対する考え方も変える必要が出てきたことを知る。また、今後は、地球環境に配慮した家や住まい方が求められることを理解する。

2) 授業の流れ

現在の住宅をめぐる新しい動きについて、①多様化する家族のかたちとnLDKの崩壊 ②シングル時代と住まい ③これからの住まい—リノベーションの重要性— ④地球環境に配慮した住まいをポイントに解説した。

少子高齢社会を迎え、家族の形も多様化した。シングル傾向は、若者に限らず高齢者にも見られる。これからの時代は一人暮らしの人たちにとっての住まいを一層考えていかなければならないのではないかと提起した。

また、これまで当たり前のようにされていた「スクラップ・アンド・ビルト」から、「リノベーション」への見直しも始まっている。また、環境に配慮した住まいづくりの動きも、最近になって広がってきた。

生活者がどういう住まい方をするのかで、地球環境への影響を少なくすることができる。教科書を使い、これまでの学習をふり振り返りながら、いまの自分にできることを考えさせた。

3) 生徒の反応と授業者の省察

住領域の学習を進めていくなかでは、こちらのねらいを超えた発言がしばしば出てくる。たとえば、コレクティブハウスをテーマにした授業のなかで、生徒から突然「子育てに適した場所はどこだろう」という発言があり、それをめぐってクラスの何人かの生徒が具体的な地域を理由つきで出してくるということがあった。生徒の思いは、安心できるまちづくりにまで発展したと考えられる。

また、住環境の授業の後、時間に余裕のあるクラスには、修学旅行で行った沖縄竹富島の民家や埼玉県川越市の蔵屋敷が並ぶ様子、千葉県浦安や震災前の神戸の町並みを写真で見せた。その直後、千葉県在住の生徒から、自分の県の団地の高齢化や無人化が問題になっているという発言があった。これにより、住環境を扱う時、生徒の身近な場所に焦点をあてて展開することの意義を感じた。

また、今後の家庭科における住領域学習の1つの方向性として、家族社会学的視点から住まいを考えることが求められているように感じた。高齢社会の進行により、地域とのネットワークという要素も重要になるであろう。

最後にとったアンケートの結果、家族・家庭領域から住領域の学習に、6～7割の生徒が興味関心をもって授業に臨んでいたことはひとつの成果としたい。

(授業者：富田道子)

4-2 カリキュラム作成の成果と課題

本稿で報告した家庭科における住教育実践は、環境教育、消費者教育、生活文化教育、キャリア教育、防災教育など、現代の教育に求められる多様な要素を含むものである。「授業者による省察」にあるように、いずれの授業も、それぞれの教師がこれまでに行ってきた授業から、さらに一歩前進したという成果を感じられるものとなっている。

具体的にあげるなら、家庭科の学習分野のひとつである「家族」分野の学習と関連づける可能性が具体的に広がったことがひとつの大きな成果である。住まいを通して、家族のあり方、さらには自分のこれからの生き方を考えるきっかけとなっている。また、深刻化する環境問題を、室内の温熱環境が何に影響されるのかを測定しながら理解し、科学的に考えていく学習の有効性も実証できた。自分の生活を科学的に見直すこ

となどは、理科との関連も深い分野だが、今後の重要な学習となることが予想できよう。

5 研究会参加者の意識変容

本研究会に参加したメンバーは、当初は主査以外に住居学を専門的に学んできた経験をもつ者はおらず、住教育実践に必ずしも積極的ではなかった。しかし、学ぶ意

欲は旺盛であり、研究会を重ねる中で、住教育に対する考え方に確実に変化が生じていった。その意識の変容について、研究会に中心的に参加していたメンバー3名にたずね、記述された内容が表5-1である。そこからは、住まいや住環境に対する関心が高まり、重要性を感じていると同時に、授業をつくることへの自信と魅力を実感するようになっていくことが確認できる。主体的に学びあうことが苦手意識の克服につながり、住教育に積極的に取り組んでいけるようになるということではないだろうか。教師が住まいや住環境に関する学びを深め、住教育のイメージを広げるきっかけを十分に得ることで、住教育に意欲をもつ教師は増えていくといえるだろう。

6 おわりに—住教育の魅力と可能性—

最後にまとめとして、住教育の授業づくりにおいて教師として心がけておくべきことは何か、本研究会の成果を踏まえて整理しておきたい。

それは、①理論と実践の両輪からなる共同の学びをつくること ②過去を踏まえ、現在を見据え、未来につながる住環境づくりの主体の育成を意識すること ③社会科学と自然科学の視点を明確にもつこと、の3点である。

子どもだけでなく、教師も実践を通して学び合うことで成長することを改めて指摘したい。家庭科教師は人数が少なく、学校の中だけにいたのでは孤立しがちである。したがって、さまざまな学びの機会を積極的に求めて行動することを意識的にやりたい。また、学び合いの際には、理論と実践の両方を押さえることが大切である。家庭科は総合的な性格をもつことから、対象とする学問分野が非常に広く、時間の無さもあって、教師は方法論の方に重点を置きがちである。しかし、歴史的な視点を持ち未来まで見通すこと、社会科学と自然科学の視点を明確に持つことで、視野の広い学びを創造したい。

また、家庭科と道徳の関連づけが学習指導要領でも示され、徳育的な家庭科の授業が時に見られるが、そのこ

表5-1 研究会の役割 —研究会参加による意識変容—

	1	2	3
研究会スタート当時の住分野の授業（づくり）に対する意識	今までは「一人暮らしの部屋探し」のなかで、「間取りを読む」「賃貸住宅の費用を計算する」程度の授業しかしていなかった。これ以上のことができるのかと不安だったが、何かできるでしょうという好奇心と乗りかかった船だからという気持ちで研究会に参加していた。	食や保育、被服分野に多くの授業時間をかけてしまい、住分野は後回し、あるいは高齢者福祉等他分野の中に組み込むなど、あまり時間をかけることがなかった。住生活分野の教材研究及び学習について、積極的に取り組むことはあまりなかった。	住まいは、人が生きていくためには必要であり、食の学習と同じように住生活分野の学習も大切であることは感じていた。かつて、男子校で私自身が年間授業計画を考えた時には、一定時間をとって、住分野の学習を行っていた。生徒は住宅選びの学習について特に熱心に取り組んでいたように思う。しかし、現在の共学校へ移ってからは、もともと学校の年間授業計画の中に住生活分野が入っていなかったため、手つかずの状態になっていた。2単位の少ない時間数の中に他の部分を削ってまで、新たに住分野の学習を加えようと努力するところまで至らなかった。
現在の住分野の授業（づくり）に対する意識	新聞で「大事だと思えば、これまで何気なく読み過ごしていた新聞記事にも、そのキーワードが目につくようになる」と読んだことがあるが、本当にその通りだった。研究会で学んだことから、授業で取り組んでみようという気持ちになり、それからは意識しなくても住領域にかかわる記事がどんどん目に入ってくるようになった。書店に行っても同様である。生徒と一緒に、興味・関心がふくらめば、視野も広がるということか。	持続可能な社会を作るという視点から、あらためて見直してみると住分野での学習がまさに「生活の器」としてさまざまな問題（環境問題や人間おしのつながり（社会制度・慣習）、生活文化、個人の生き方等々）と関わってくることに気づき、住分野の授業研究の意識が高まった。	家庭基礎2単位の少ない時間数の中であっても、一定量の住分野の学習は必要である。特に家族・家庭の学習につなげて住生活の学習を入れると、スムーズに学習の流れを作りやすいことが分かった。生徒の発想は新鮮であり、建築の分野で活躍する人も大いに育って欲しい。そのためきっかけづくりができるぐらいの授業作りをしていきたいと思っている。人の生き方にかかわってくる住まいのあり方を高校生が学び、考えていく時間をプロデュースできることは、家庭科の魅力の1つであると実感した。
研究会のどんな内容によって、その意識が生まれたか	高度な（専門的な）内容はあまり関心がなく、高校でそこまで扱わなくてもという思いもあったが、主査のこれまでの高校での実践や大学での講義内容とそれに対する学生の反応をきき、一緒に勉強している先生方の実践や雑談的に話している内容に、授業をおこなうヒントのようなものがあったように思う。しかし、やる気になったのは、研究会での主査の姿勢や過去の教師歴にもあったと思う。私自身の授業に対する姿勢を改めて考え直させるような力があつたように思う。	この研究会に参加することにより、「持続可能性」という言葉を意識するようになった。環境共生住宅や換気の大切さ、赤外線放射温度計を用いた授業展開のアイデアなど、毎回刺激を受けた。コレクティブハウス「かんかん森」のDVDや街並みウォッチングなどの授業実践の報告もよかった。	研究会の中で、多くの実践に触れたこと、そして、メンバーからのアドバイスにより、自分自身が久しぶりに住分野の授業に取り組み、生徒の反応からささやかな手応えを感じることであったことにある。私自身が勉強になったし、住まいの大切さを実感することもできた。『住環境リテラシーを育む』（萌文社）から学んだことが大きかった。

とには、批判的見方を常にもっておきたい。家庭科に求められるのは、生活を科学的・批判的に検討し、主体的に生活創造するという視点である。結果として家族に感謝したり、環境を大切にす気持ちをもったり、日本という国に愛情や誇りを持つようになることは大切だが、授業のねらいとは別に評価していくべきであろう。

家庭科教師の多くは住分野の授業づくりに苦手意識を持っていると「はじめに」の中で述べた。現状ではそれは事実である。しかし、本研究で1年半の間に15回の研究会を開催しつつ、家庭科授業においてさまざまな住教育実践を行ってきたなかで、住教育の面白さや可能性の大きさが実証されたといえるだろう。ここで得られた成果は、大学などの教員養成の場でも活かされるものと考えている。

特に、これまでの家庭科では実践報告としてほとんどみられなかった環境教育的な内容の深まりや、コレクティブハウスから今後の「共生」のあり方を考える授業などは、これからの住教育の方向性として期待される内容ではないだろうか^{注3)}。

住教育の実践研究はまだ緒についたばかりである。住教育は、環境教育、福祉教育、消費者教育、キャリア教育、生活文化教育などとも関連が深い。今回授業として実践してきたテーマ以外にもさまざまな教材や授業展開の可能性があるだろう。また、今回は研究メンバーが主に中学校や高等学校で家庭科を担当していたことから、小学校家庭科に関する討議や授業実践はほとんど行うことができなかった。したがって、これらを次の課題とし、さらに継続して実践・研究を深め、教科書や学習指導要領を超えたカリキュラムの開発をめざしていきたい。

<注>

- 1) 2009年6月に主査(妹尾)が香川県の高専家庭科教員に対して実施した研修前のアンケートより。
- 2) 他の実践校では、DVD教材^{文6)}を使用した。インタビュー資料は、DVDの解説書^{文7)}にある補足資料のコピー。コレクティブハウスの平面図や生活場面を紹介するのにDVD教材を用いると理解しやすい。
- 3) 本研究がスタートする前になるが、コレクティブハウジングの教材としての可能性について、妹尾・金子の共同研究として、家庭科教育学会大会において発表を行っている^{文8)}^{文9)}。

<参考・引用文献>

- 1) 妹尾理子：「住まい・住環境」学習にどう取り組むか、家庭科研究, No.265, p.6, 芽ばえ社, 2007.1
- 2) 妹尾理子：住環境リテラシーを育む家庭科から広がる持続可能な未来のための教育一, 萌文社, 2006.4
- 3) 妹尾理子：住生活学習を環境学習の視点で一涼しさをつくる知恵を探ろう一, 技術教室, No.675, pp.34-39, 農文協, 2008.10
- 4) 大矢英世：身近な住環境について考える一お互いの住

環境ウォッチングから学ぼう一家庭科研究 No.281, pp.40-45, 芽ばえ社, 2009.2

- 5) 富田道子：自立と生活共同一家族領域から住領域へ②一家庭科研究 No.285, pp.42-51, 芽ばえ社, 2009.10
- 6) ニチブン：家庭科教育実践講座 AVANCE 動画(DVD3)「保育・家族」(監修：倉持清美、編集委員：妹尾理子), 2007
- 7) ニチブン：家庭科教育実践講座 AVANCE 動画解説書 pp.186-187, 2007
- 8) 妹尾理子・金子京子：家庭科におけるコレクティブハウジングの課題と可能性(その1)第50回日本家庭科教育学会大会発表要旨集, 2006
- 9) 金子京子・妹尾理子：家庭科におけるコレクティブハウジングの課題と可能性(その2)～中学校における授業実践とその検討～, 第51回日本家庭科教育学会大会発表要旨集, 2007